

vol.
01



しんどさんこばなし

聞いてみよう。
新どさんこの
ホントのところ。

より強く、より高く、より熱く。
小さな一歩が
過去も未来も
大きく変える



新どさんこ

#01

小林千栄子さん

小林酒造三代目・前社長の長女。滝川、長沼などで中学校教諭を30年勤めた後、(株)小林家を起業。平成26年7月一般公開し、今年9月に来館5000人を達成。三女の母、56歳。

●小林家 ●夕張郡栗山町錦3丁目109
電話:0123-767-2288

営業時間:10時~16時(4月~10月は~17時)
案内料(文化財保存協力費):1000円 定休日:水曜 P20台

生家の存命を賭けて

残りの人生を歩み始める

「足元にご注意くださいね、この家は段差という畏だらけ」。小林千栄子さんの軽快な案内が頬を緩ませ、こぼれた笑いが響く。

銘酒「北の錦」の創業者、初代米三郎が明治30年に建てた小林家。酒蔵ゆえの男尊女卑の家風を嫌い「家を出て自立する」と教員になった千栄子さん。しかし、その30年後。生まれ育った家が家を取り壊しの危機から救ったのも、彼女だった。教員を辞してまでの、決断。退職金を修繕などに充てて、小林家保存のために2年前に会社を立ち上げたのだ。

「50歳を過ぎてどうして、と思うでしょう? それに、あんなに嫌っていた家のために、と。でも、3年前までここに暮らし、家財を守り続けた母のことや、親孝行ができなかった父のこと、そして自分が勤めていた中学校が廃校になったこと。その全てのタイミングと私の思いが、この一歩につながったのかな、と思いますね。凛と佇む姿と、穏やかな声が対照的だ。」

明治・大正・昭和の心を

守り、伝え、次の世代に

事業の核は、小林家を一般開放して、119年に及ぶ物語を、千栄子さんを含む4人の守りびとが伝える家屋案内。3カ月ごとに切り替わる2つの見学コースと、おのおのでアレンジを利かせた語り口調のおかげで、リピーターが絶えないという。

それにしても、調度品や生活道具が、あまりにも自然に置かれている。「壊される心配? ないですね。現に今まで一度も破損したことはないんですよ。それに物はいつか必ず壊れます。その時はその時でしよ?」とあつげらん。このたおやかさ、しなやかさは、あんなに抵抗していた自身の過去があったからこそではなかったか、と思えてならない。

千栄子さんの手によって再び動き出した小林家の歴史。そしてそれは、今を生きるわれわれの生活を結び付け、豊かさとは何か、仕事とは、生きるとは何か、を問いかけているようだ。

インタビューー

新どさんこ研究所 所長
山岸 浩之
Hiroyuki Yamagishi

2014年北海道博報堂入社。
コミュニケーション戦略局長兼マーケティング部長として、
北海道の様々なクライアントの戦略立案やリサーチを担当。

新ど研

北海道の新しい潮流

<http://shindoken.com>



新どさんこ研究所

